

二元代法制史料

大島 立子

総説

1 『通制條格』『至正條格』『元典章』の解説

元朝の官撰の法令集で完璧に残っているものはない。そのために法の体系がどのようなものであったか、またモンゴルの法とそれまでに培われてきた漢族のそれがどのように関連付けられてきたのかなど、検討すべき課題が多々残されている。モンゴル政権では、太祖チンギス・ハンが決めた法を大札撒（エケジャサ）として重視していた。しかし元朝を興し支配機構の規範が必要とされ、漢族社会の秩序維持が重視されるようになり、元朝全般の法規定においてエケジャサの占める度合いは低くなった。世祖フビライは即位のはじめから法の制定を漢族官僚に命じており、統治するうえで法の必要性を認識していたことがわかる。一方、漢族の官僚は常に体系的な法や成文法を望んでいた。しかし条例はできても世祖の時代にはなかなか成文化されたものを公布するに至らなかったようである。法令集が編纂されはじめたのは世祖以降であり、それについては『元史』はもとより、元代に書かれた文献にみられる。仁宗時代（一二三二―一二三九）刊行の『風憲弘綱』・泰定元年（一二三二）正月の『大元通制』・至順元年（一二三三）二月の『経世大典』などの法令集などであるが、いずれもまとまった形で残っていない。そのような状況のなかで、現在我々には『通

制條格』・『至正條格』・『元典章』という三種の比較的まとまった法令集が残されている。

上記三書のうち『通制條格』・『至正條格』は政府によって編纂されたものである。いずれも完本は残っていない。現在用いられている『通制條格』は明代の影印本の残簡であり、『大元通制』の条格（一一五一条のおよそ半分（六四六条）である。太宗六年（一二三四）から延祐三年（一二二六）の条例が見られる。『至正條格』は至正六年（一二四六）に公布された。その残片しか見られなかったが、二〇〇二年に韓国で条格・断例の一部が冊子の形で発見され、二〇〇七年に影印本・校注本があわせて刊行された。至正四年（一二三二）までの条例が見られる。『通制條格』と『至正條格』の比較から法の変遷がたどれる。両書は基本的には同じ形態ではあるが、『通制條格』では、決定された詔・法・規定だけでなく、時には法制定の発端が書かれているが、『至正條格』にはない。

『元典章』がどのような経緯で編纂されたのかは、まだ明らかにされてないが、その内容から官府にあった文書を比較的正確に記録したと考えられる。六〇巻の正集と新集からなり、中統元年（一二六〇）から至治元年（一二三二）の条例がある。官撰の二書と異なり、詔勅などをのぞき、吏・戸・礼・兵・刑・工の六部に分かれている。各官府で必要な条例をまとめていたものを参考にしたのであろう。各条例は決定するまでの過程（関連官府の文書の往来）が『通制條格』よりも詳述されており、法の決定過程・法の施行状況を見ることができ。最終的に受け取った官府の多くが福建地域であり、同地域の官府から出た文書と考えられている。すべての条文が詔令や各機関から出された命令、あるいは皇帝が認可したものであることから、官制の法令集のように扱ってよく、今までもそのように使用されてきた。しかし確定した法であるが、条格としてまとめられる以前の草稿とも考えられている。また刑部の巻を中心に見られる判決文は、供述書・判決の過程が詳述され、判例集のように見えるが、法の確認と情状酌量の基準を示している法令として見るべきであろう。以上の三書とも文体の面からいえば、その間に係わった官府の文章から必要な部分だけを節文・節該として要約・抜粋し、掲載している。部分的であるがもとの文書が残され、同一条文のなかに漢語、モ

ンゴル語直訳体、吏牘文が混在していることが多い。

詔や法が書かれた資料として、ほかに法制史上、碑文・古文書の類いが貴重な第一次資料である。しかし『通制條格』・『至正條格』・『元典章』は元代の法令を研究するための基本的な資料であり、ひろく利用できるので本稿で扱う史料は『至正條格』及び『元典章』から選んだ。『通制條格』はすでに訳注があるので、読解の史料から省いた。これらの書に見られる文書の構成については、陳高華等点校『元典章』（天津、天津古籍出版社、二〇一一年）、洪金富校定本『元典章』（台北、中央研究院歷史語言研究所、二〇一六年）を、吏牘文については、吉川幸次郎『元典章に見えた漢文吏牘の文体』（『校定本元典章刑部』上、京都大学人文科学研究所、一九六四年所収）を参考にしたい。

なお研究史については参考文献を参照された。

【参考文献】

- 植松正「元典章・通制条格——附遼・金・西夏法——」（滋賀秀三編『中国法制史 基本資料の研究』東京大学出版会、一九九三年所収）
- 植松正編『元典章年代索引』（同朋舎、一九八〇年）
- 植松正編『元代政治法制史年代索引』（汲古書院、二〇〇八年）
- Paul Heng-chao Chen, *Chinese Legal Tradition under the Mongols; The Code of 1291 as Reconstructed* (Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1979)
- 金浩東『《至正條格》之編纂及元末政治』（韓國学中央研究院編『至正條格』校註本』二〇〇七年所収）
- 李玠璽『《至正條格》之編纂及其法制史上的意義』（前掲『至正條格』校註本』所収）
- 金文京『有關慶州發現元刊本《至正條格》的若干問題』（前掲『至正條格』校註本』所収）

植松正「『至正條格』出現の意義と課題」『法制史学会会報』一二号、二〇〇七年所収)

陳高華「『至正条格・断例』初探」『中国史研究』二〇〇八年二期)

高橋文治「律令と典章——『元典章』はいかに編まれたか——」(赤木崇敏・伊藤一馬・高橋文治・谷口高志・藤原祐子・

山本明志『元典章が語ること——元代法令集の諸相——』大阪大学出版会、二〇一七年所収)

小竹文夫・岡本敬二編著『元史刑法志の研究訳注』(教育書籍、一九六二年)

梅原郁編『訳注中国近世刑法志』下(創文社、二〇〇三年)

Paul Ratchevsky, *Un Code des Yuan, Bibliothèque de l'Institut des Hautes Études Chinoises, Vol. IV* (1972-1985)

2 モンゴル語直訳体漢語文体

モンゴル語直訳体の解説の手引きとして田中謙二「元典章文章の研究」(初出一九六四年、改訂増補『田中謙二著作集』二、汲古書院、二〇〇〇年所収)、亦隣真「元代硬訳公牘文体」(『元史論叢』一輯、一九八二年、北京、中華書局、加藤雄三訳『内陸アジア言語の研究』一六号、二〇〇一年)、李崇興・祖生利『元典章・刑部』語法研究(鄭州、河南大学出版社、二〇一一年)がある。田中謙二氏は、モンゴル語文章と、直訳体を並列して文法を示し、また語彙を説明し、及び当時の官僚機構に言及している。亦隣真氏も頻出する特徴的な語彙の説明、文法について説明している。李崇興・祖生利両氏は吏牘文・直訳体の用語及び助詞や語尾変化を示す語彙を辞書的に見つけるに便利である。宮紀子「モンゴルが遺した「翻訳」言語」(『内陸アジア言語の研究』二八号・二九号、二〇〇三・二〇〇四年)がある。また前掲『元典章が語ること』の各論文も元典章読解を助けてくれる。小林高四郎・岡本敬二編『通制条格の研究訳注』(国書刊行会、一九六四・一九七五年)は、語釈は少ないが、すべてを訓読しているので大いに参考になる。ほかに詔令、礼部、兵部及び若干の項目について校訂、訳注があるが、それについては【参考文献】の項を参照されたい。以上の書物でモンゴル語直

訳体漢文の読解の手引きとして充分ではあり、屋上に屋を重ねるにすぎないが、あらためて以下に簡単に述べておく。

『通制條格』・『至正條格』・『元典章』をはじめとした編纂されたものの直訳文体は、世祖以前にある程度決まり事があつたようだが、世祖以降の法令ではさらに定式化した。モンゴル語直訳体漢文は、基本的にはモンゴル語の語順にならつた表現で書かれた。モンゴル語はいわゆる膠着語で、接尾辞によつて、言葉の文法的・機能的働き、動詞の時制が示され、動詞は最後につくのが一般的である。一方、漢語は言葉の文章上の機能は語順によつて示され、基本的には動詞は主語の次に来る。したがつて、モンゴル語の語順にそつた漢文を作成するために、これらの語尾を付した漢文が発明された。たとえば「私は大都に行く」は、漢語では「我去大都」であり、モンゴル語直訳体では「我大都根底去有」となる（根底は助詞「に」にあたる）。日本語と同じウラル・アルタイ語であるため、語順は日本語に近く、日本語の感覚で文章が読め、日本語修得者は文体になじみやすい。ただ日本語の場合と同様に、修飾語と被修飾語の関係が不明瞭の場合があることに注意が必要である。基本的にはモンゴル語の語順に沿っているが、同一文章のなかに漢語の表現・漢文の語順で書かれている箇所も混在し、読解を困難にする理由のひとつである。

直訳体で付記される名詞の格は、日本語の助詞でいえば主格は〈が〉・属格は〈の〉・与位格は〈に〉・対格は〈を〉・奪格は〈より・から〉・造格は〈よつて〉・共同格は〈ともに・と〉にあたる。これらはモンゴル語では異なる表記である。しかし直訳体では、的はほぼ属格でのみの使用だが、ほかの助詞は同じ文字・文字群である根底・裏・行が併用されている。ただ主格は強意でない限り示されず、また対格も明確である時は示されない。造格は依、共同格は與と漢語表現をすることが多い。また従属節のような文章のなかでは、主語にあたるものは対格で示されることもある。被修飾語との結びつきが強い人称所有格は後置される。たとえば、「我が文書」は文書我的、「彼の頭」は頭他的となる。

モンゴル語では重複を明確にすることが多く、直訳体でもそれは比較的嚴格に示されており、同種のものが複数あ

ることを示す時には毎が後置され、いくつかのものを並列するいわば「など」の場合は等が付記される。

動詞語尾も、モンゴル語では各種ある。形動詞（日本語の連体形）の語尾としての・處などが使用されるほか、後文に接続する動詞語尾は着・時・間などで示される。しかしすべての動詞語尾が漢字で示されているのではない。なお多くの文章の語尾に有が付記される。これは終止形を示すのではなく、日本語で使用される存在や確認を示し、さしずめ「食べるのである」の「ある」に近い用法のモンゴル語を訳したもので、体言・形容詞で終わる文章にもつく。したがって、「無有」は「ないのである」の意であり、有の否定ではない。ただし「有無」の「有」の意での使用もある。また命令語尾に者・着、否定命令に休：者が使われ、也者は希望的な命令、願望、要望に使われる。譲歩あるいは仮定、条件、及び後文との間に因果関係があることを表す呵がある。過去を表す來、過去・完了を表すには了・了來・了也・了去がつき、あるいは冒頭に既が付記される。また過去の否定は不會で表記される。

ほかに頻出する文字群は、直前の文章が直接的・間接的語法を示す麼道、理由・原因を示す上頭がある。多くはの上頭で理由・原因を示すが、時に漢文用法の依・爲が冒頭についている。

使用される漢語が当時の吏牘文的な口語であることも特徴としてあげられよう。モンゴル語と漢語を対照して訳す時に、音節の長いモンゴル語に合わせるに口語的な複合単語が対応しやすかったためか、あるいは漢語文語の素養がなかったものが通訳・書記であったためかもしれない。なおすべての言葉が漢語に訳されているのではなく、モンゴル語をはじめとして、漢語以外の言葉を音写したものが散見する。

【参考文献】

小澤重男『元朝秘史全釈』上中下（風間書房、一九八四～一九八九年）

小澤重男『元朝秘史全釈続攷』上中下（風間書房、一九八四～一九八九年）

寺田隆信・熊本崇編「校定元典章兵部」上中下（『東北大学東洋史論集』二〇四号、一九八六—一九九〇年）

小野裕子『元典章』市舶法全文訳注（『東アジアと日本——交流と変容——』九州大学大学院比較社会文化研究院、二〇〇六年所収）

元代の法制研究班『元典章・禮部』校定と訳注「一」（『東方学報』京都八一—八三冊、二〇〇七—二〇〇八年）

張金鈺校注『元典章校注 詔令 聖政 朝綱 臺綱 吏部卷』（合肥、黄山書社、二〇一一年）

一 法例

＊本稿で扱う史料には、正字・異体字などが混用されているが、ここでは全て正字で表記し、また訓読はしない。

【史料Ⅰ】

『元典章』卷五、台綱、内台「整治台綱」

① 原文

大德十一年十月十五日、欽奉聖旨節該、世祖皇帝立御史臺、中書省・樞密院・制國用使用（司）内外但是勾當裏行的官人每、使見識、行無體例的勾當呵、體察者。肅清百姓每的風俗、照刷各衙門的文卷者、麼道、教行呵、於民便益來。如今脫脫奉（奏）國公・右（左）丞相爲御史大夫、只兒哈郎爲御史中丞、整治臺綱者、麼道、委付了也。不以是何軍・站・民・匠管着的官人每、不用心撫治、率斂錢物、無體例橫斜（科）差役的上頭、百姓每生受有。係官錢糧・造作物料内、克落・侵盜的、移易借貸的、覷面皮、要肚皮、教百姓每生受、不公不法的官吏每根底、監察每・肅政廉訪司官人每、用心依體例體察的每根底、添與他每名分。他每無體例差池了呵、告的人每依着在先聖旨體例裏、御史臺裏昔（告）者。監察每・肅政廉訪司官每、體察出來的勾當問的其間、不揀誰休阻壞者。這的每道、這般宜諱了也、麼道。別

了體例行呵、他每不怕那甚麼。但有合行的勾當、依着在先行來的聖旨體例裏行者。各自委付着的勾當裏、用心向前行者、麼道。衆人每根底宣諭的聖旨行了也。聖旨俺的。羊兒年十月十五日。

② 訓読 省略

③ 語釈

《節該》主旨の概略（田中二〇〇）三八九頁参照）、しかし要約というよりも必要部分を抜き出したものであろう。ほかに聖旨の該などの表現も見られる。以下の現代語訳では該は訳さない。《制國用使司》税役を中心に取り扱った官署であり、中書省にある戸部から財政権を独立させるために至元三年（一二六六）に設置された。至元七年（一二七〇）に廃止されたが、至元八年（一二七一）設置の尚書省は、この官署を昇格させ、その任を受け継いだだけでなく、中書省から権限を奪った。《但是》あるいは「但」は、『元朝秘史』のモンゴル語の漢訳として強意の意に使用され、ここもそれに従う。《勾當》仕事、公務。《見識》策略、計略。《無體例》「體例（法、きまり）がない」の意だけでなく、直訳体・吏牘文では、「悪いこと」「不正」の意でも使われる。ここでは後者の意にとった。【解説】での漢文との比較を参照。《體察》実地に調査・審理する、自ら調査する。《照刷》文書の検査。春季・夏季の二回、監察御史によって行われた。《整治》厳粛に整える。《臺綱》政事を行う上の綱紀。《不以是何》何でも。《軍・站・民・匠管着的官人》元朝では、兵役は軍戸、駅伝に関する役は站戸、職人の戸は匠戸とし、一般の民戸とそれぞれ別の管轄下にあった。《克落》ピンハネをする。《移易》変える。《肚皮》賄賂。《添與他每名分》彼の官位を上げる。添與は黜陟に対応して使用される。なお名分は官位の意。《差池》そろわない、間違い、意外なこと、思わぬ災難。《不揀誰》誰でも。《別》そむく。《不怕那甚麼》どうしておそれないことがあろうか。「おそれないと罰を受けるなどの困ったことになる」という含みがある。《向前》今後。《俺》一人称の複数形である。皇帝や上級官署では単数でも複数で表すことがある。《羊兒年》丁未年。大徳一一年（一二〇七）。

④ 和訳

大徳一一年一〇月一五日、「御史台が」欽しんで奉った聖旨の節該に、「世祖皇帝が御史台を立て、『中書省・樞密院・制国用使司の内外でまさに公務を行っている官人が策略を弄し、悪いことを行っていたら、実地に調査せよ。人々の風紀を厳しく取り締まり、各衙門の文巻を照刷せよ』と、『文書を』下させたのは、民にとってよかつた。今、『朕（武宗）は』秦国公左丞相脱脱を御史大夫とし、只児哈郎を御史中丞とし、『綱紀を厳格に整えよ』といって、委ねたのだ。あらゆる軍〔戸〕・站〔戸〕・民〔戸〕、匠〔戸〕を管轄する官人らが心して〔人々を〕慰撫せず、錢物を収奪し、不正にかつてに差役をするので、人々は苦しんでいる。官の錢糧・〔官が〕製造するための物品をピンハネし、盗むもの、借貸に流用するもの、「相手の」顔色をうかがつて賄賂をもとめるなど、人々を苦しめる不正や違法行為をする官吏らを、監察〔御史〕・肅政廉訪司の官人らで心して法によって自ら調査するものを昇進させる。彼らが不正やまちがいをするれば、告発する者は先の聖旨にある法に従つて、御史台に告げよ。監察〔御史〕・肅政廉訪司の官ら自らが調査していることをただしている時、誰も妨げるな。このことを『このように宜諭したぞ』と言う。法に背いて行えば、彼らは困ったことになるぞ。もし下すべきことがあれば、先に下された聖旨の法によって下せ。各自が委ねられている公務を、心して今後は行え、と。衆人らに宣諭する聖旨を下したぞ。わが聖旨である。羊の年一〇月一五日」と。

【解説】

大徳一一年正月に第二代皇帝成宗が死去し、皇位継承の争いの後、武宗は五月に即位した。脱脱は武宗が皇帝になる以前の臣下であり、その即位に尽力した。即位直後に左丞相の位を得、御史大夫は兼任であったととれる。只児哈郎は後に御史大夫に昇格する。

武宗が御史台の人事を行うにあたり、世祖の聖旨をあらためて示し、御史台の責務の主旨について述べている。元

代では、中書省（民事）・樞密院（軍事）とともに官僚監察機関である御史台が三大官府であり、これらの長官は皇帝のいわば諮問機関を作っていた。御史台の監察実務を行うのは監察御史であった。また各地を道（最終的には二）に分け、官府を肅政廉訪司（はじめ提刑按察司）とし、管轄地区の官僚の監査を行った。

世祖の詔は『元典章』巻五、内台に、至元五年七月「設立憲台格例」として、漢語文語で書かれた条例が採録されている。本条の世祖の聖旨の部分は「一、彈劾中書省・樞密院・制國用使司等内外百官奸邪非違、肅清風俗、刷磨諸司案牘、并監察祭祀及出使之事」とある。本例で「使見識、行無體例的勾當」とある箇所は「百官奸邪非違」とある。なお成宗即位後の至元三十一年七月・仁宗延祐六年十二月（『元典章』巻二、聖政、肅台綱）、英宗即位の至治元年（『元典章新集』朝綱、御史台、整治台綱、「田中二〇〇」三六一頁参照）にも同じ聖旨が発令されている。

【書式】

冒頭の聖旨以下が、御史台が受けとった武宗の聖旨であり、そのなかに世祖の聖旨が示されている。世祖の聖旨を含め、モンゴル語直訳体で書かれている。「衆人每根底宣諭的聖旨行了也。聖旨俺的。羊兒年十月十五日」とあるが、聖旨の末尾には、このように聖旨を宣諭したことを改めて強調する例がしばしば見られる。

【史料Ⅱ】

『元典章』卷三八、兵部、違例「禁治飛放」

① 原文

元貞三年二月、建寧路承奉行省劄付、檢會到先欽奉聖旨、蠻子田地裏有的行中書省・行樞密院・行臺爲頭勾當裏但行踏官人每根底・通事每根底・民戶每根底、您每行閑雜飛放有、道。如今咱每行飛放的不曾道的上頭、別箇勾當裏但行

の官人每根底、別箇通事每、揀麼是誰飛放呵、鷹狗每行他每的合收的拘收者、道了、這般宣諭了。私下擅自飛放的行拿着呵、依在先聖旨體例裏、那箇日頭裏騎的鞍・馬・弓・箭・鷹・狗行、那箇日頭裏穿的襖子（了）・衣服他每的要了、打七下者。聖旨俺的。欽此。已經遍行各處、欽依去訖。今體知得各路府州司縣并宣使亦不刺金說稱、一等不務營生、游手・好閑・破落戶人等、聚集群黨、所到去處、詐稱官豪勢要之家養放鷹鵠昔博赤并放馬人等、以鷹食・馬料爲名、百般索要酒食頭牲、搶奪錢物。倘若不從、便行打拷。使被害平民無所伸訴。及過往軍人亦搔擾百姓。若不嚴行禁治、深爲未便。省府合下仰照驗施行。

② 訓読 省略

③ 語 釈

《建寧路》江浙等行中書省管轄下の福建宣慰司にある路。現福建省。《承奉》上級官署から承る。《行省》行中書省のこと。行中書省は中書省の地方出先機関。《劄付》中上級官署から下級官署への文書。《檢會》調査する、調べ確かめる。《蠻子田地》旧南宋領域、江南地域、長江以南の地域。《行樞密院》樞密院の地方出先機関。多くは長く設置されなかったが、この時期、四川行樞密院がある。《行臺》行御史台のこと。御史台の地方出先機関。江南行御史台（南台）、陝西行御史台（西台）があった。《行踏》往来する、体を動かす、つきあう。《閑雜》むだな。《飛放》鷹狩り。《揀麼是誰》誰でも。《鷹狗每行他每的》人称所有格が後置する例である。助詞は所有格よりも前につく。《私下》ひそかに、勝手に。《擅自》勝手に。《欽此》此を欽む。それ以前の文章までが聖旨であることを示すにすぎず、訳す必要はないともいえるが、本稿では「欽しんで受けとる」と訳す。《體知》子細に観察し了解すること。实地調査。《宣使》胥吏。【解説】を参照。《說稱》公言する、言明する。《官豪勢要》官僚・貴族・豪族など権勢があるもの。《一等》一種。《好閑》怠け者。《去處》ところ。《昔博赤》シバグチ、鷹を飼育する鷹匠。「鷹房子」「鷹坊戸」と漢訳される。元代ではモンゴル貴族は彼らを所有していた。《鵠》鷹の一種。《打拷》責め打つ、体刑を加える。

〈伸訴〉上級官僚に理由を説明すること、裁判を要求すること。〈未便〉よろしくない。〈合下〉ただちに。〈仰〉上級機関から下級機関に申しつける。〈照驗〉調べる。

④ 和訳

元貞三年（一二九七）二月、建寧路が「江浙」行省から承った割付に「次のようにあった」。「先に欽しんで奉った聖旨を確認したところ、『旧南宋治下にある行中書省・行枢密院・行〔御史〕台が長として行う公務でまきに出向した官人ら・通事ら・民戸ら、おまえたちは私的に鷹狩りをしている、という。今、我々には鷹狩りをすると言わずに、別の公務を行っている官人ら、通事らなど誰であつても鷹狩りをすれば、『彼らの』鷹や犬などの押収できるものを没収せよと、このような宣諭をした。ひそかに、かつてに鷹狩りをした者を捕らえたならば、先の聖旨にある法に従つて、その日に騎乗した鞍・馬、弓・箭・鷹・犬と、その日に着ていた彼らの上着や衣服をとりあげ、『罰として』七回打て。朕の聖旨である』と「あつた」。「中書省は」此を欽しんで受けとり、すでに各所に遍く下し、欽み「聖旨に」依るように「伝えた」。

今、各路・府・州・司・県ならびに宣使の亦不剌金が「次のように」言ってきたことを実地調査した。『ある種の生業をつとめない遊び人・なまけもの・ごろつきが徒党を組み、到るところで、官や権勢のある家の鷹鶴を養っているシバグチ（鷹匠）ならびに馬を放牧する者であるどまし、鷹の餌・馬の飼料を名目にいろいろ酒食・家畜をもとめ、錢物を奪っている。もし従わないと、すぐに打ちすえる。被害の人々には訴えるところがない。そのうえ、往来する軍人もまた人々をわずらわしている。もし厳しく禁止しなければ、まことによろしくない』と。「中書」省はすみやかに検討したことを下すので、施行されたい」。

【解説】

元貞三年は第二代皇帝成宗時代。建寧路は江浙等行中書省福建道宣慰使司管轄下にあった。おそらくは、宣使亦不剌金が不法な鷹狩りが行われていることを訴えてきたため、聖旨を再確認し、法の施行を促している。宣使亦不剌金については不明であるが、ここでは総管府・州・録事司（元朝特有の官署で、府や州などの重要地に置かれ、県の管轄から区別した）・県の長官と同等に扱われているので、福建道宣慰使と思われる。

モンゴル人は鷹狩りを好み、皇帝をはじめ、有力者は鷹匠を持ち、彼らは鷹の餌やみずからの飲食を人民に要求し、人々を苦しめることが多かった。特に地方官の首長がモンゴル人の場合には、禁令もなきがごとくであったのであろう。至元二四年（一二八七）九月一四日に、鷹匠やほかの公務で派遣されている者が、鷹の餌や自らの食事を要求する事を禁止した聖旨がある（『通制條格』卷二八、雜令、擾民）。至元二九年（一二九二）・三〇年（一二九三）にも同様な禁令が出ており、本件の後にも大徳七年（一二〇八）に同様の禁令が出ている。『元史』卷一〇五、刑法志に、「諸職官違例放鷹、追奪當日所服用鞍馬衣物沒官」とある。なお本件は、不法な鷹狩に対する罰則と、それに便乗した無頼のやからをとりしめることが主旨の条例である。

本例のモンゴル語直訳体の部分は、田中謙二氏がすでに解説している（『田中二〇〇〇』三三九頁）が、筆者と直訳体の語尾の解釈を異にしている。すなわち「…勾當裏但行踏官人每根底・通事每根底・民戸每根底、您每行閑雜飛放有、道」（公務で出張する官人らに、通事らに、民戸らに「対して」、「あなたがたのところでは、無用に（鷹・犬を）を飛放させている」といわれている）とある。筆者は、「您每行」とその直前の「根底」までを同格とし、「行」「根底」いずれも従属文の主語を示すとして訳した。また「官人每根底・通事每根底・民戸每根底」とある「民戸」は「軍戸」の誤謬とも考えられる。元代は、軍官の力が強く、管轄の軍戸を使役することがしばしば見られるためである。

モンゴルの笞刑・杖刑は七を単位とし、五十七までは笞、それ以上一百七までは杖で打った。七を単位にするのはモンゴル族の慣習であった。当初、笞十のところを、七とし、モンゴル時代に入って、刑が軽減化したのが、その後、む

しろ重くなった。なお元代の刑はほかに、徒・流・死がある。

【書式】

文頭の行省の割付より以下が、中書省の文書である。聖旨と各路府州司県及び宣使亦不剌金のことばが引用されている。聖旨はモンゴル語直訳体であり、宣使亦不剌金の言は吏牘文である。

【参考文献】

岩村忍「元朝の笞杖刑について」(『東方学』三輯、一九五二年、のち岩村忍『モンゴル社会経済史の研究』京都大学人文科学研究所、一九六八年所収)

【史料Ⅲ】

『元典章新集』刑部、訴訟、約会「僧俗相干詞訟」

① 原文

延祐七年十一月◇日、江西行省准中書省咨、宣政院呈、延祐七年四月十四日、奏過事内一件。行宣政院官人每俺根底與將文書來。和尚每、除犯奸盜・詐僞・致傷人命重罪有呵、依舊例交管民官歸問外、其餘僧俗相爭的勾當有呵、與行省・行宣政院・宣慰司・管民官一同約會歸結者。和尚不揀甚麼勾當有呵、諸衙門官人每添氣力者。更行宣政院的文書與行省并各路行移者。這般聖旨有來。如今行宣政院說、他每有合行的勾當呵、依着體例裏、與各路并各寺院住持約會問呵、有司家推稱着、俺無體例與住持約會、麼道、爲這般上頭、勾當裏好生窒礙有。如今依自世祖皇帝以來累降聖旨、但凡僧俗相犯的勾當有呵、行省・各路諸衙門官人每添氣力、做伴當者。這般行了聖旨。不添氣力、不做伴當、別了的

官人毎奏將來、要罪過者、俺行與省家文書呵、怎生、奏呵、奉聖旨、那般者。麼道、聖旨了也。欽此。具呈照詳。都省咨請依上施行。

② 訓読 省略

③ 語釈

〈江西行省〉江西等処行中書省の略。〈准〉下のものからうける。〈咨〉同等の官府間の文書。〈呈〉下級官位・官府から上級への文書。〈與將〉よこす、伝達する。〈舊例〉『通制條格』・『元典章』では、多く金朝の法、泰和律を指すが、ここでのいう旧例は以前の法の意。【解説】を参照。〈管民官〉達魯花赤を除く路・府・州・県などの地方官。〈歸間〉罪を審議する。〈歸結〉解決する。〈添氣力〉力を尽くす。〈行移〉行文移牒の略。官府の照会文。〈有司家〉ここでは管民官。〈推稱〉口実をつくる、かこつける、口実。〈住持〉仏教寺院主管の僧の職称。〈伴當〉ともにする。〈省家〉中書省。〈具呈照詳〉具さに呈しますので検討してください。

④ 和訳

延祐七年（一三二〇）十一月◇日、江西行省が受けた中書省からの咨が「あり」、宣政院からの呈に「あった」延祐七年四月一四日に「宣政院が」上奏した一件。「行宣政院の官人らが私どもに「次のような」文書をよこした。『和尚らが姦・盗・詐偽、人命を傷つけるような重罪を犯せば、旧例では、もとより管民官に審議させ、そのほかの僧俗が相争う事案があれば、行省・行宣政院・宣慰司・管民官がともに約会し、解決せよ。和尚のいかなる事案についても、諸衙門の官人らは力を貸せ。また行宣政院の「訴訟に関わる」書は行省ならびに各路に送れ』と。このような聖旨があった。【ところが】今、行宣政院が言うに、『彼ら（管民官）は行うべき事案があれば、法に従って、各路ならびに各寺院の住持と約会し審議すべきであるが、管民官はごまかし、私どもには住持と約会する法がない、と言ひ、このため公務がよくよくさまたげられている』と。

今、世祖皇帝以来、かさねて下された聖旨によると、『もしもおよそ僧俗が相犯す事案があれば、行省・各路諸衙門の官人らは力を貸し、ともに「審議を」せよ』と。このような聖旨が下されている。『力を貸さず、ともに「約会を」しない違反した官人らについて上奏し、罰を与えよと、私ども（宣政院）が中書省に文書を下したらば、どうでしょうか』と、上奏すると、奉った聖旨に、『そのようにせよ』とあった。これを欽しんで受けた。具さに呈するので、ご検討ください』と。中書省は「江西行省に」文書を送り、上のように施行するよう請う。

【解説】

元朝の宣政院はチベット地区を治める官府であるが、ラマ教をはじめとした仏教、道教、また僧侶・道士をも管轄下に治めた。南宋を支配下に治めてから、その出先機関として行宣政院が杭州に置かれた。

管轄機関の異なるものが関わる事案が起きた場合に、関係各府が協議して、解決にあたり、その協議を「約会」といった。本件で旧法とあるのは、皇慶二年（一三三三）に僧侶の犯罪に関する法が変わったからである。旧法は、

世祖皇帝的聖旨、皇帝的聖旨明白有「犯奸的、殺人來的、做賊説謊的、犯罪過僧道每、則交管民官問者。其與民相爭地土一切爭訟勾當、管民官約會他每頭目一同問者」。（『元典章』卷三九、刑部、刑名「僧道做賊殺人管民官問者」の

大徳七年（一二三三）の文書

とあり、重罪を犯した僧については、管民官だけの裁判となっていた。『元史』卷一〇二、刑法志、職制上には、諸僧人但犯姦盜詐偽、致傷人命及諸重罪、有司歸問、其自相爭告、從各寺院住持本管頭目歸問。若僧俗相爭田土、與有司約會、約會不至、有司就使歸問。

とあり、軽罪や僧と俗両方に関わる犯罪については、管民官と宣政院との約会が必要であった。その法が、皇慶二年六月十七日、欽奉節該、今後管民官休管和尙每者。依着在先聖旨體例、奸盜詐偽、致傷人命、但犯重罪

過的、管民官問者。除這的外、和尚每自其開…。(『通制條格』卷二九、僧道、詞訟)

皇慶二年六月乙亥、詔諭僧俗辨訟、有司及主僧同問。(『元史』卷二四)

とある。すなわち以後、僧侶が犯した訴訟は重罪でも管民官のみに委ねず、宣政院と約会することになった。

本例では、管民官が約会をしようとしなかったために訴えたものである。どのような種類の裁判についてかは不明であるが、管民官が裁判権を削減されたことへの不満からの抵抗であったのかもしれない。元朝の多くの皇帝や皇后は仏教を信奉していたために、僧の力が強く、重罪を犯した僧侶らに対して管民官だけで裁判をすることが変更されたのであろう。一方、時の皇帝仁宗は漢文化に理解を示していたが、即位に力を尽くした太后を抑えることができなかった。僧侶に関わる事件での管民官の裁判権を取り上げられた背景には、太后の權威がみえ、また管民官の抵抗には、時の皇帝の意向が後ろ盾にあったことが推察される。

【書式】

江西行省への中書省からの文書であり、「」は宣政院の文書の内容であり、そのなかに行宣政院と聖旨が含まれている。モンゴル語直訳体で書かれている。

【参考文献】

有高巖「元代の司法制度 特に約会制度に就いて」(『史潮』六卷一号、一九三六年)

海老沢哲雄「約会に関する覚書」(小竹文夫・岡本敬二編著『元史刑法志の研究訳注』教育書籍、一九六二年所収)

森田憲司「約会の現場」(梅原郁編『前近代中国の刑罰』京都大学人文科学研究所、一九九六年所収)

大藪正哉「元史刑法志に見える僧尼の犯罪に関する規定」(前掲『元史刑法志の研究訳注』所収、大藪正哉『元代の法制と宗

教』秀英出版、一九八三年再録)

野上俊静「元の宣政院について」(『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』東洋史研究会、一九五〇年所収)

野上俊静『元史釈老伝の研究』(朋友書店、一九七八年)

【史料Ⅳ】

『元典章』卷一七、戸部、分析「父母在許令支析」

① 原文

至元八年七月、御史臺承尙書省劄付、來呈、監察御史體究得、隨處諸色人家、往往父母在堂、子孫分另、別籍異財、實傷風化。乞照詳。送戸部講究得、唐律、祖父母・父母不得令子孫分另別籍。又舊例、女真人其祖父母・父母在日支析及令子孫別籍者聽。又條、漢人不得令子孫別籍、其支析財產者聽。今照得仕(士)民之家、往往祖父母・父母有支析文字。或未會支析者、其父母疾篤及亡歿之後、不求醫侍疾、喪葬爲事、止以相爭財產爲務。原其所由、自開創以來、其漢人等別無定制、以致相爭、詞訟紛擾如此。若依舊例卒難改革。以此參詳、隨代沿革不同、擬合酌古准今。自後如祖父母・父母許令支析別籍者聽、違者治罪。省府准擬、仰照驗、施行。

② 訓読 省略

③ 語釈

〈體究〉身をもって考究する、詳しく調べる。〈分另〉家産を分割すること、門戸を別にすること。〈風化〉『通制條格』では、風俗とする。〈講究〉議論する、考究する。〈舊例〉金代の最後の法である泰和律を示す。至元八年(一三四八)十一月に使用が禁止されるまで、旧例として裁判の基準になっていた。〈支析〉分家する。〈參詳〉比較してよく検討することか。〈酌古准今〉古代のことを今日の状況にのっとり選ぶ。〈支析別籍〉『通制條格』では「分

析」の文字しか見えない。〈省府〉尚書省、『通制條格』では、都省となっている。〈准擬〉下級が提議したことを批准する。〈照驗〉よく調べる。

④ 和訳

至元八年（一二四八）七月、御史台が承った尚書省からの割付に、「〔御史台の〕呈によると、『監察御史がよく調べたところ、各地の家々では、往往にして父母の生前に、子孫が家産・戸籍を分け、まことに風紀を乱している。〔これについて〕検討されたい』」〔とある〕。そこで「〔尚書省は〕戸部に〔この文書を〕送り、調べさせたところ、『唐律では、祖父母・父母は子孫に家産分割し、別籍させてはならないとある。また旧例では、女真人はその祖父母・父母の生前に分家し、子孫を別籍させることを許している。〔しかし〕また一条あって、漢人には、子孫と別籍にすることを認めなかったが、財産を分割することは許した。今、士民の家を調べたところ、しばしば祖父母・父母は家産分割の契約書を持っている。またまだ分割していない者がその父母の病が重篤になり、死亡しても、医者診察を求めず、葬式の用意をしようとせず、ただ財産を争うことにとめる。もともとこのようになったのは、建国以来、漢人らについて、特に定制がないために相争い、このように訴訟が紛糾するのである。もし旧例に依っているのであれば、ついに改めることは難しい。このためよく検討したところ、歴代の沿革は同じではなく、昔のことを参考にしながら現状を考えるべきである。今後は、もし祖父母、父母が家産分割し、別籍することを許すのであれば、認める。違犯すれば罪にあてる』と。尚書省はこの決定を承り、検討した事を下すので施行されたい」とある。

【解説】

これは監察御史が漢人の分籍・家産分割の状況を調査し、それにもとづいて尚書省が戸部に検討させ、決定した法である。世祖は中統三年（一二三二）に、史天沢・姚枢に法の制定を命じ、至元元年（一二六四）以降、段階的に各条

格が定められ、至元八年（一二七二）に完成し、一月には旧例と言われた泰和律の使用が禁止された。この条文により分籍・分財に関わる条例の制定過程（現状調査と検討）を見ることができるといえる。

唐律以来の漢人に対する祖父母・父母の生前中の分籍禁止が金代にゆるみ、慣例になっていることをふまえ、理念第一とせず、現状にあわせた法が制定されたことを示している。

『通制條格』卷三、戸令「親在分居」は、本条とほぼ同じであるが、『通制條格』では、唐律との比較検討は省かれている。なお『通制條格』では、「至元八年六月、尚書省御史臺呈…」とあるが、それは、尚書省が決定した時が六月で、『元典章』に見る七月は、御史台に戻された時を示しているのであらう。

本例は、条文のなかに、唐律と金代の泰和律ともに言及している数少ない例である。唐律には次のようにある。「諸祖父母・父母在、而子孫別籍異財者徒三年。若祖父母令別籍及子孫妄繼人後者、徒三年、子孫不坐。諸居父母喪、生子及兄弟別籍異財者、徒一年」。金朝では、女真の従来の法のほか、隋・唐・遼・宋の法を参照して法がつくられた。最後に制定されたのが泰和律である。女真人と漢人に対する法が異なるとき、付記された。漢人・高麗人・渤海人を対象としたものは、基本的には唐律に従った。なお明代では、洪武元年發布の『大明令』戸令に、「凡祖父母・父母在者、子孫不許分財・異居。其父祖許令分析者、聽」とあり、元朝の法を引き継いでいるが、『大明律』戸律では、「凡祖父母・父母在、而子孫別立戶籍分異財產者、杖一百。須祖父母・父母親告乃坐。若居父母喪、而兄弟別立戶籍、分異財產者、杖八十。須期親以上尊長親告乃坐」とあり、唐律と同じ（ただし刑は異なる）に戻っている。

至元七年（一二四七）に設けられた尚書省は、八年（一二四八）二月まで中書省と並立していたが、六部及び行中書省は尚書省に従属した。それゆえ、行省は行尚書省となり、戸部は尚書省の管轄下に置かれていた。翌年、尚書省と中書省は合併し、尚書省の名は消えるが、合併後の中書省は尚書省系の官僚が実権を握った。

【書式】

「」内は、尚書省の文書であり、そのなかに監察御史の報告と戸部の見解が示されている。くだけてはいるが漢文語法の文である。

【参考文献】

陳高華『中国婦女通史 元代卷』（杭州、杭州出版社、二〇一一年）

【史料Ⅴ】

『至正條格』断例、卷八、戸婚「戸婚禁收庶母并嫂」

① 原文

至順元年九月二十三日、中書省奏、御史臺備着監察每文書、俺根底與將文書來。漢人歿了哥哥、他的阿嫂守寡其間、兄弟每收繼了多有。似這般呵、體例裏不厮似一般有。如蒙定擬通例禁治的、與將文書來的上頭、教禮部定擬呵、今後漢人・南人收繼庶母并阿嫂的、合禁治、麼道、定擬行有。依他每定擬的、教行呵、怎生、奏呵、奉聖旨、那般者。欽此。刑部議得、今後似此有犯男子・婦人、各杖捌拾柒下、主婚者答伍拾柒下、媒合人肆拾柒下、聘財一半沒官、一半付告人充賞。雖會赦猶離之、都省准擬。

② 訓読 省略

③ 語 釈

〈備〉上級官署から下級官署に文書を下すこと。〈收繼〉父や兄弟の妻をその死後に迎えること。〈厮〉「互いに、相」の意のモンゴル語動詞語尾を示すときにしばしば使われる。〈定擬〉調べ決定する。法的に使用されるときには、実

質は最終案であるが、認可は皇帝や上部官庁でなされる。〈通例〉慣例。〈庶母〉実母以外の父の妻や妾。〈主婚者〉結婚を決定する者。通常は、父母か祖父母。〈媒合人〉媒酌人、元代では至元八年（一三四八）、社制の規定に、社長は社ごとに媒酌人を決めることとある。〈告人〉告発者。

④ 和訳

至順元年（一二三〇）九月二三日、中書省が「次のように」上奏した。「御史台が監察〔御史〕らに送った文書を私どもによこしてきた。『漢人は兄がなくなり、彼の兄嫁が節を守っているのに、兄弟らが兄嫁を引き継いで娶ることが多い。これは法に外れているようだ。慣例では、禁止されているとのことだ』という文書をよこしてきたので、〔中書省は〕礼部に検討させると、『今後、漢人・南人が父の妻や兄嫁を娶ることを禁止すべきである』と、決定し、下している。彼らの決定に従って、『文書を』下せば、どうかと、上奏したところ、聖旨に、『そのようにせよ』とあった。此を欽しんで受けた。刑部は次のように〔刑罰を〕決めた。『今後このようなことを犯す男子・婦人がいれば、各杖八十七、主婚者は笞五十七、媒合人は笞四十七とする。聘財の半分は官が没収し、もう半分は告発人に賞としてあてよ。恩赦にあっても、二人は離すこと』と。中書省は決定した事を受け入れた。

【解説】

父や兄の死後、実母以外の父の妻や兄嫁を妻にする風習がモンゴル民族にはあった。一方、結婚などの規定は「本俗に従うべし」とされており、漢族には息子や弟などが庶母や兄嫁を迎え入れる收継が禁止されていた。『元史』卷一〇三、刑法志には、「諸漢人・南人、父没子收其庶母、兄没弟收其嫂者、禁之」「諸姑表兄弟嫂叔不相收、收者以姦論」とある（『元典章』卷一八、戸部、不収継「漢兒人不得接續」も参照）。しかし実際には漢族も厳格に守っていなかった。モンゴルの風習に染まったのか、あるいはもともと漢族の間でもこのような慣習があったのか、判断はしがたい。しか

し『通制條格』「夫亡守志」至元一三年（一二七六）三月の条に、「夫亡、願不改嫁、亦不與小叔續親」とあり、收継は慣例としてあったようでもある。『元典章』でも收継を前提とした案件が散見する（卷一八、戸部、收継）。本条は庶母や兄嫁を娶る收継の禁止を再確認し、その罰則を明確にしたものである。

恩赦にあえば、大罪以外の刑罰は免れるが、禁止されている婚姻が許可されるわけではなかった。

【書式】

中書省からのモンゴル語直訳体（漢語語法も混在）の上奏文である。御史台からの問いあわせに対し、礼部に確認し、それにもとづき刑部が制定した刑が示されている。

本条のように発端になった具体的な問題の事案についての記述がないのは『至正條格』の特徴である。

【参考文献】

有高巖「元代に於ける婚姻に関する法律」『史潮』一〇卷一号、一九四〇年

二 判例

【史料VI】

『元典章』卷四二、刑部、殺親属「打死男婦 婦（又）」

① 原文

至元十三年六月初八日、中書兵刑部、來申、軍戸賀林告、親家母張二嫂、將女丑兒非理打罵身死。責得張阿趙狀招、不

合先爲親家賀林遣火、將本家元與男婦物件燒訖、不肯陪還、以此挾恨。於至元十三年正月十四日、爲男婦賀丑兒偷訖燒餅、將本婦膊頂按在坑上、揭去衣服、於臀片上用杖子打了數十餘下、倒在火內、將肩甲肱膊燒破、虛稱火燎瘡疾。又於十七日、賀丑兒偷食冷餅、依然揭去衣服、用杖子於帶腫赤右臀片上打了五六下、以致臀片上下腫赤、瘡發申徹於腰、致命身死罪犯。結案、申乞照詳。得此。省部議得、張阿趙所犯、量情擬決四十七下、單衣受刑、燒埋銀既是同居、不須徵理。

② 訓読 省略

③ 語 釈

〈中書兵刑部〉至元一三年（一二七六）までは六部は二部・三部・四部に統廃合がしばしば行われてきた。一三年はじめ、兵・刑部は統合していた。時に中書と冠する。〈申〉下級官署から上級官署への文書。〈親家〉姻戚関係による親族をさす。〈責得〉要求。〈狀招〉供述。〈不合〉不屈き、氣にくわない。〈遣火〉失火。〈膊〉肘から手首まで。〈肱膊〉胸骨と肩骨。〈火燎〉火事・たいまつ。〈瘡疾〉きず。〈瘡發〉きず。〈結案〉結審。〈得此〉来申の文章の終りを示すにすぎないが、本稿では「これを受けとった」と訳す。〈單衣〉笞打ち、杖打ちの刑を女性にする場合、着衣一枚が許された。〈徵理〉問いただす。

④ 和 訳

至元一三年（一二七六）六月八日、中書兵刑部が受けとった申に、「軍戸賀林の告発によると、『娘の丑児は、姑の張二嫂が非道に打ち罵ったので、死んでしまいました』とある。張阿趙からの供述書によると、『けしからんことに先に嫁の里の賀林は失火し、我が家から嫁に贈った物を焼いてしまったが、賠償しようとしませんので、このために恨んでいました。至元一三年（一二七六）正月一四日に、嫁の賀丑児は焼餅を盗んだので、彼女の腕・頭を炕の上におさえつけ、衣服をまくりあげ、臀部を杖で数十回打ちすえたところ、火のなかに倒れ、肩や胸にやけどを負いましたが、火

事による傷と偽りました。また一七日、賀丑児は冷餅を盗み食いたので、前と同じように衣服をまくりあげ、帯状に赤く腫れあがっている右臀部を杖で五、六回打ったため、臀部の上下の腫れ物は赤くなり、その傷は腰にまで及び、命を落とすに至った罪を犯しました』とのことで、結審しました。申し送りますので、お調べ願います」と。これを受け取った。中書兵刑部では、「張阿趙の犯罪は、事情を鑑み、笞四十七とし、衣を一枚にして刑をうけさせよ。焼埋銀については、すでに同居しているので、問う必要はない」と「結審した」。

【解説】

上申してきた官府名は記されていない。殺害された嫁の実父の告発と加害者の姑の供述書がともに記され、兵刑部が判決したものである。裁判の過程が見られる。『元典章』の本例の前に、至元五年（一二六八）の案件があり、

舊例、即毆子孫之婦令廢疾者、杖一百、死者、徒二年。其阿李因毆打男婦邢茶哥致死、所犯罪徒二年、決徒年笞五十、單衣受刑。部擬、量決三十七下、單衣受刑。行下本州斷訖。

とある。泰和律では嫁を誤って致死した場合、徒二年であるが、最終的には、刑部の判断で、笞三十七としている。本件では、「量情」とあり、「決四十七」は軽減された結果である。両者の相違は、旧例時代と元代の基準が異なるためか、あるいは「情」のとらえ方からくるものかは不明である。ちなみに『元史』卷一〇五、刑法志、殺傷に「諸男婦雖有過、舅姑輒加殘虐致死者、杖一百七」とある。

元代では、殺害した場合、被害者の家に焼埋銀（銀五〇兩）が支払われ、恩赦にあっても、焼埋銀の支払いの義務はあった。しかし同居している場合は、家計を一にしているので、支払われる必要がない。しかしここで「焼埋銀既是同居、不須徵理」の但し書きがあるのは、婚約は整っている（定婚）が、正式に結婚の儀礼を行っていない（成婚）と見なされ、同居か否かが検討されたのであろう。なお元代では、重い傷害を与えた場合にも、養濟銀が支払われた。

【書式】

兵刑部による吏牘文で書かれている文書。原告である被害者の父の告発文と加害者の供述書、それにもとづいた兵刑部の結審からなっている。

【参考文献】

岩村忍「元朝の法律における人命賠償——焼埋銀と私和錢について——」（『東洋史研究』一二巻四号、一九五三年）
内田智雄「焼埋銀と埋葬銀——元、明、清刑罰史の一側面——」（『同志社法学』三九巻三・四号、一九八七年）

【史料Ⅶ】

『元典章』巻四九、刑部、免刺「偷粟米賊人免刺」

① 原文

大德八年正月◇日、承奉中書省劄付、河（江）北道廉訪司申、賊人朱仲友、於大德三年五月内、偷盜訖事主謝秀粟穀五斗、估贓計中統鈔二兩。江陵路刺斷訖五十七下、不見通例、具呈照詳。送刑部、照得、大德七年七月内、承奉中書省劄付、也可札魯忽赤蒙古文字譯該、河東山西道宣慰司呈、賊人張成・李添兒等偷盜事主王聚等舊來的麥穀。如故意偷錢物來的賊一般刺字呵、重了的一般、怎生。明白定奪、俺行回文書與將來的、省官人每識者。送本部、議得。飢饉之際、竊糧食者、固法所不容、而情在所有。比年田禾薄收、物斛湧貴、貧民闕食。爲救一時之急、因而竊取糧食、原其所由、情非得已。若與偷盜錢物一體刺斷、似涉太重。擬合依例斷罪、權宜免刺。敢有再犯、一石之上者、依例刺字、相應。都省議得、竊盜糧食、初犯依准本部所擬、再犯者臨事詳情議斷。奉此。今承見奉、本部議得、賊人朱仲友所招、

除先犯隨從姜晚十等強盜閭千二、不曾得財、欽遇詔赦釋免外、又於大德三年五月二十六日、因闕口糧、除(偷)盜謝秀粟穀五斗、未曾出門、被看倉人魯六一捉獲、拒捕、將事主咬傷。估計至元鈔四錢、贓不滿貫、江陵路却將本賊刺斷。既係格前、似難取問。擬合除洗元刺字樣、相應。都省准擬、仰依上施行。

② 訓読 省略

③ 語釈

〈江北大廉訪司〉 淮西北道肅政廉訪司。〈事主〉 被害者。〈估贓〉 贓物の価格を定めること。〈江陵路〉 河南江西北行中書省管轄下。現荊州。〈也可札魯忽赤〉 札魯忽赤(ジャルガチ)は裁判官の意であり、也可(エケ)は大の意で、裁判官の長官。元代ではモンゴル人、色目人の裁判を司る大宗正府の長官をいう。〈譯該〉 モンゴル語文を訳したものであるが、文書の受領者側が訳した(谷口高志「カアンのことばが翻訳されるまで」前掲『元典章が語ること』六一―六二頁)。

『元史』卷一〇二、刑法志に「諸内外百司應出給割付、有額設譯史者、並以蒙古字書寫」とある。〈定奪〉 決定する。

〈比年〉 毎年。〈物斛〉 糧食。〈涉〉 いたる。〈相應〉 ふさわしい。よろしい。〈朱仲友〉 文頭では宋とあるが、どちらが正しいかは判断できない。〈招〉 口書き、供述書。〈格前〉 赦詔がでる以前。〈取問〉 尋問、尋ねる。

④ 和訳

大德八年(一二〇四)正月、承った中書省の割付に、「[御史台が受け取った]江北大廉訪司の申に、『賊人の宋仲友は、大德三年五月に被害者謝秀の粟穀五斗を盗んだ。その値は中統鈔二両にあたる。[そこで]江陵路は刺刑にし、答五十七にした。今までにない例なので、具呈しますので、お調べください』とある。[中書省は]刑部に送り、[刑部が]検討したところ、大德七年七月に承った中書省の割付に、エケジャルガチからのモンゴル語文書の訳該にあった河東山西道宣慰司からの呈に、『賊人の張成・李添兒らは被害者王聚などが穴にしまっていた麦穀を盗んだ。もし錢物を故意に盗んだ賊と[同じ]』ように刺刑にすると、重いのではないか、どうだろうか。明確に[刑を]定め、私ども

のところに文書をよこし、それを省官人らに知らせるように』と、本〔刑〕部に送ってきたので、「次のように」討議した。

『飢饉の際に糧食を盗んだとしても、もとより法の許すところではないが、情としては許したい。毎年收穫は少なく、糧食〔の値〕は高騰し、貧民の食は欠乏している。一時の急をしのぐと糧食を盗んだのであり、もともとその理由は情としてやむをえない。もし「平常の」錢物を盗んだことと同じに刺刑にすると、重すぎないか。規定によって罪を断じるべきだが、かりに刺刑は免ずるべきであろう。〔もし〕あえて再び犯し、一石以上であれば、規定によって刺刑にするのがよろう』と。中書省は、『糧食を盗めば、初犯は本〔刑〕部が決めたようにし、再犯の場合には、法などを検討し、事情を詳しく調べ、決定する』と。これを奉る。

今、この奉を承り、本〔刑〕部は決議した。『賊人朱（あるいは宋）仲友の自白によると、先に「盗みを」働いた時には、姜晩十らに従い閭千二から強盗したが、金品を得なかった。〔そのうえ〕かたじけなくも恩赦に遭ったが、また大徳三年五月二六日、食糧が欠乏したために、謝秀の粟穀五斗を盗んだが、まだ門から出る前に、倉庫番の魯六一に捉獲され、捕らえられまいとして被害者にかみつき傷を負わせた。盗んだものは至元鈔四錢にあたり、それは一貫に満たない〔という免罪の理由がある〕が、江陵路が本賊を刺刑にした。〔しかし、これは〕恩赦の前であり、罪を問う対象ではない。先にいれた刺の字を除洗するのがよいであろう』と。中書省はこの決定を受け入れた。上に従って施行された』と。

【解説】

宋（あるいは朱）仲友が糧食を盗んだ罪に対して、江陵路は笞刑と刺刑にした。しかし飢饉のためやむなく窃盗をした前例に鑑み、刑部は罪を問わず、刺青を抹消するように結審した。『元史』卷一〇四、刑法志に「諸盜米糧、非因飢

饅者、仍刺斷」とある。

窃盜犯は、初犯は左臂、再犯は右臂、三犯は項に刺刑をした。笞杖刑については、計画のみの場合は笞四十七、未遂は笞五十七であり、また盗みの多寡により罪刑が決まった。刺刑後、犯人逮捕の役である警迹人にさせられた。なお未遂は刺刑をしない。窃盜の場合、危害を与えれば、刑が重くなるが、本件では危害を与えたことについては不問に付されている。その理由は不明である。なおモンゴル人・女性・老幼、及び親族間の窃盜をした場合など刺刑を免じた。『元史』卷一〇四、刑法志、盜賊に、

諸竊盜初犯、刺左臂、謂已得財者。再犯刺右臂、三犯刺項、…並警迹人、官司以法拘檢關防之。其蒙古人有犯、及婦人犯者、不在刺字之例。

とある。

恩赦前に犯したか否かが問題とされているが、恩赦後は親殺しなどの大罪以外の罪は免がれるからである。ここでの恩赦については、

大德六年三月丁酉、以旱、溢爲災、詔赦天下。大都平瀼被災尤甚。『元史』卷二〇、成宗紀

とある。

【書式】

江北道廉訪司への中書省からの返書であり、同廉訪司がもたらした事案と、それに対する刑部が下した判決である。そのなかに同様のエケジャルガチからの事案と、それに対する刑部の結審が含まれている。文体は、ジャルガチの部分が直訳体（「田中二〇〇二」参照）であるほかは文語漢語である。

【参考文献】

田村實造「元朝札魯忽赤考」(『桑原博士還曆記念東洋史論叢』、一九三〇年所収、田村實造『中国征服王朝の研究』中、東洋史研究会、一九六四年再録)

【史料Ⅶ】

『元典章』卷一八、戸部、嫁娶「胡元一兄妹爲婚」

① 原文

大德六年四月◇日、江西行省據龍興路申、承准江西湖東道肅政廉訪司牒該、承奉行御史臺劄付該、據監察御史呈、照刷江西行省文卷數內一件。大德四年四月二十二日、據臨江路備、新喻州申、大德四年正月二十一日、據五都第十六社長胡信甫狀申、大德三年十二月初六(十)日、有社戸胡元三前來對信甫言說、我親弟胡千七、將伊小女名元七娘與伊長男胡元一爲妻。我是他親兄、更不聽從勸諭。乞與申官。得此。勾責得胡元三名大舉狀結。今被申人胡千七及胡千八、與大舉係是同胞親兄弟。亡宋庚午年不記月日、有弟胡千七捧抱得七都黎曾三男黎庚俚歸家爲男、改名胡寄俚、在家哺養。即今胡元一。在後有弟胡千七生下親男胡狗俚・胡女俚・胡卯俚・胡弟俚・胡正俚、及親女一人胡細妹、即今胡元七娘。於至元三十年五月、有弟胡千七又生女辰姑。於大德三年十二月初六日、有弟胡千七對大舉言道、我擇定此月初八日、將我小女元七娘與胡元一爲妻。大舉對本人道、胡元一喚元七娘爲妹、恐道理過不得、弟胡千七不從勸諭。至初八日、有弟胡千七請大舉飲酒主盟、將伊女元七娘與伊男胡元一成親。大舉道、我不敢喫你酒。說罷、大舉出外。至初十日回家、有妻阿張對大舉言說、弟胡千七初八日已將伊小女元七娘與伊男胡元一成親了當。大舉恐已後事發、必致負累。當〔日〕大舉前去說、知本社長知會、申報到官是的。及責得胡千七的名大安・胡千八・胡元一小名寄俚・胡右七娘即胡元七娘狀結、相同。州司看詳、胡元一雖係黎層三所生之子、已是過養與胡大安爲嗣。即係胡右七娘之兄。若便

議擬斷離、卑州在先不曾斷過如此體例。申乞照詳。得此。府司看詳、若便斷離、緣胡寄俚終是別姓黎層三之子、難比同姓爲婚之例。若准已婚爲定、却緣胡大安已將黎唐俚於籍內、作胡寄俚名字爲姓、與胡右娘爲兄妹、供報在官。申乞照詳事。得此。爲是、已婚爲定、似難別議。割付本路照驗去後、據檢校官呈、檢照得胡寄俚既與胡右七娘作兄妹、共(供)報在官。若令已婚爲定、有失人倫。其胡大安已有親生兒男。擬合令胡寄俚歸宗、作婿、似爲長便。大德五年正月初十日、又據臨江路申、准廉訪司牒該、前事若依省割、已婚爲定、其胡千七已有親子五人承嗣、理合明行斷、令胡元一認伊身的姓黎。若不改正、別無兄妹成婚爲夫妻之禮。申乞改正。得此。本省看詳、若令胡元一認姓歸宗、作婿、緣係關係人倫爲例事理。移咨都省照詳、及割付臨江路照驗、回准中書省咨該、爲前事送禮部議得、胡元一係胡大安義子、既與胡七娘成親。參詳合准行省檢校官及廉訪司所擬、令胡元一復其本姓與胡七娘依舊成婚、歸還黎氏、相應。據胡大安不應罪犯、已經欽遇詔恩、別無定奪。具呈照詳。咨請依上施行。准此。今來卑職看詳、胡太安將親女胡元七娘婚配義子胡元一爲妻、原其倫理甚非所宜。然而都省已行准擬、再難別議。今後若不通行禁止、切恐習以成俗、有傷風化、又係爲例事理。呈乞照詳。得此。憲臺合下仰照驗、行移有司、申覆合于上司禁約施行。

② 訓読 省略

③ 語釈

〈江西湖東道肅政廉訪司〉至元一五年に立つ。龍興路(現江西省)に司が置かれた。〈牒〉同等官署間の文書。〈臨江路〉・〈新喻州〉江西等処行中書省は、現江西省。〈都〉・〈社〉県の下に置かれた行政区分。〈勾責〉調べる。〈狀結〉供述。〈亡宋庚午年〉元至元七年(一二七〇)、宋咸淳六年にあたる。〈捧抱〉唐律以来、異姓養子は禁じられていたが、三歳未満であれば許されていた。「抱いてつれてきた」は、三歳以下の幼児であることを示しているのであろう。〈即今〉今。〈飲酒主盟〉ここでは、結婚の宴をとりしきる。〈成親〉結婚。〈説知〉知らせる。〈看詳〉審査検討する。〈過養〉養子にする。〈嗣〉漢族はすべての男子は父の嗣である。〈議擬〉推し量る。〈終〉すでに、つまり。

《供報》上申する。《檢校官》中書省・行省に置かれ、公務について検討する。《廉訪分司》ここでは江西湖東道廉訪政廉訪司。《理合》当然すべきである。《不應罪》『明律』刑律・雜犯に「謂律令無條、理不可爲者不應爲（律令に条文がないが、許しがたいこと）」とあるのと同じか。《憲臺》御史台。《申覆》申請し、審議する。

④ 和訳

大徳六年（一二三〇）四月◇日、江西省が「受けとった」龍興路の申に「龍興路が」受けとった江西湖東道肅政廉訪司の牒該「があり」、〔江西湖東道廉訪司〕が承った〔江南〕行御史台の割付の該に監察御史の呈「があり」、〔監察御史が〕照刷した江西行省の一件「があった。それによると」、大徳四年（一二三〇）四月二二日、臨江路からの文書に、新喻州からの「次のような」申があった。

大徳四年正月二一日、五都第十六社の社長の胡信甫の上申によると、「大徳三年（一二九九）一二月十日、社戸の胡元三がやって来て、信甫に、『私の実弟胡千七は、彼の娘の元七娘を彼の長男の胡元一に与え妻とした。私は彼の実兄であり、そこで「それはよくないことだと」諭したが、聞き入れない。官に「是否の」お伺いをたてるようにお願いします』と言った。これを受けた。胡元三、名は大挙の供述を調べた「ところ次のようであった」。

今申したてられている人、胡千七及び胡千八は大挙と同胞の兄弟である。月日は記されていないが、亡宋庚午年（一二七〇）に、弟の胡千七は七都の黎曾三の息子黎庚俚を抱き、家につれ息子とし、胡寄俚と名を改め、家で養育した。これが今の胡元一である。その後、弟の胡千七には実子の胡狗俚・胡女俚・胡卯俚・胡弟俚・胡正俚、及び一人の娘胡細妹すなわち今の胡元七娘が生まれた。至元三〇年（一二九三）五月、弟胡千七にはまた娘の辰姑が生まれた。大徳三年一二月六日、弟胡千七は大挙に、『私は今月の八日に日を定め、娘の元七娘を胡元一に与え、妻とする』と言った。大挙は本人に、『胡元一は元七娘を妹と呼んでいた。道理にはずれているのではないか』と言ったが、弟の胡千七は忠告に従わなかった。八日になると、弟の胡千七は大挙に「結婚の儀での」飲酒を主り、彼の娘の元七娘と彼の息子の

胡元一とを結婚させるよう頼んだ。大挙は、『私はおまえの酒を飲むまい』と言うや、家から出た。一〇日になって家にもどると、妻の阿張が大挙に、『弟の胡千七は八日にすでに娘元七娘を息子胡元一と結婚させてしまった』と言った。大挙は今後、事が発覚すれば、必ず累が及ぶだろうと恐れた。「そこで」その日に大挙は来て、本社長に知らせ、『官に報告するのがよい』といった。そこで胡千七すなわち名大安・胡千八・胡元一・小名寄俚・胡右七娘すなわち胡元七娘の供述を取ったところ同じであった」とのことである。

〔新諭〕州官が「次のように」検証した。「胡元一は黎厝三に生まれた子であるが、すでに胡大安の養子となり、嗣子になっている。したがって胡右七娘の兄になる。そこで「二人を」別れさせると決定するにしても、私は今までこのような事例について判決したことはない。申し上げますのでよくお調べください」と。〔臨江路〕これを受けた。そこで〔臨江路〕府官は「次のように」検討した。「もしそこで別れさせるとしても、胡寄俚はもともと別姓の黎厝三の子であるので、同姓婚「の罪の」例になりにくい。「一方」もしすでに結婚したとすると、それでは胡大安はすでに黎厝俚を籍にいれ、胡寄俚という姓名にし、胡右娘とは兄妹として官に上申している「ことと矛盾する」。申し上げますので詳細にお調べください」と。〔江西行省は〕これを受け取った。

これによると、結婚が決定しているのは、別に議論の余地がない。本路に検証したことを割付した後、〔江西行省の〕検校官から、「検証したところ、胡寄俚はすでに胡右七娘と兄妹として官に届けている。もし結婚させたとすると、「兄妹での結婚になるので」人倫を失うことになる。「しかし」その胡大安には実子の男児がいる。考えるに、胡寄俚を実家に戻し、「あらためて」婿とするのが最善ではないか」と、言ってきた。

大徳五年（一二三四）正月一〇日に、また臨江路の申によると、廉訪司からの牒該に、「先の事は、〔江西行〕省の割付がいうように、すでに結婚していることは決定しているが、その胡千七には実子五人の後継者がいるので、きちんと別れさせ、胡元一を旧姓の黎であることを認めさせるべきである。もし改め正さなければ、兄妹が結婚して夫妻

となる礼は決してない。改めることを願うよう申します」と。これを受け取った。

本省が調べるに、「もし胡元一を実家に戻し、婿となることを認めさせるにしても、人倫に係わる例である。中書省に送り、検証を〔請い〕、及び臨江路に割付し検証〔させたところ〕」、中書省が送り返してきた咨該に、「先の事を礼部に送り、礼部が〔次のように〕議した。『胡元一は胡大安の義子であるが、すでに胡七娘と結婚した。検討した結果、行省の検校官および廉訪司の検討したものに従うべきとし、胡元一を旧姓にもどし、もとのように胡七娘と結婚させ、黎氏に帰すのがよからう。胡大安は不応罪を犯したが、すでに恩赦に遇っており、あらたに検討することもない。具呈しますので検証ください』と。〔行中書省に〕上のように施行するよう咨を送ります」。これを受けた。

今、私〔江西行省の官〕が考えますに、「胡大安は娘の胡元七娘を義子胡元一と結婚させ、妻としたのは、もともとその倫理上、甚だよろしくないでしょう。しかし中書省がすでに決定を下したので、再びあらたに論議できません。今後もし〔養子と実子との結婚の〕禁止が行き渡らないと、これが習いとなり風習となり、風紀をそこなうことになり、また前例となることを切に恐れます。お送りしますのでよく検討することをお願いいたします」と。これを〔御史台は〕受けた。御史台はただちに照驗したものを有司に下し送り、関係上司に禁約を申覆し、施行した。

【解説】

養子である兄との戸籍上の兄妹婚の是非を説いたものである。発端は大徳三年（一二九九）、胡大安が他家からの養子と実子とを結婚させたことに対して、それが合法か否かを、兄の胡大挙が社長を通して官へ問い合わせたことである。結婚を既成事実とし、その後の処置を検討する過程が見られる。胡元一は養子とはいえ、実子として届けられていることから、この結婚は、兄妹婚あるいは同姓婚として違法になるが、実質は実の兄妹でなく、もともとは別姓のものである点を考慮し、兄をいったん実家に帰し、姓を戻し、結婚を許すことにする。本件に限らず、『元典章』に見

られる判決は既成事実を認める傾向にある。しかも本事案は恩赦前のことであるので、兄妹を結婚させたことに對する罪は不問にされている。しかし本件の主旨は、この兄妹の結婚を許可するか否かというよりも、戸籍上また實際に兄妹として育った関係のなかでの結婚の禁止である。これにより「不應罪」が法例として明記されたのではないか。

江西地域の風俗には、いわゆる儒学的な家族理念とは異なる家族関係があったのであろう。そのために「このような判決を下したことがない」と、新喻州の官はいつているのではないか。養子と実子の結婚は問題にされなかった、ということであらう。一方、兄の大挙は元朝の法では不法になるのではないかと危惧したのである。

江西地方は宋代より健訟の地として名高い。原告が「後に知られたら」と恐れ、早くにいわば自己申告的に告訴したのもそのためであらう。

【書式】

原告はまず所属の社長に訴え、州、路、行省、それを監察する廉訪司文書が送られたことが、「江西行省據龍興路申」から「據五都第十六社長胡信甫狀申」までに見える。社長の上申以降は、各管轄機関での見解、及び、礼部による見解が記され、更に行省による最終案を御史台が受け入れ決定したものである。

【史料Ⅸ】

『元典章』卷四四、刑部、品官相毆「知府毆打軍官」

① 原文

皇慶三年四月◇日、福建宣慰司承奉江浙行省劄付、准樞密院咨、移准中書省照會、來呈、宣德府知府怯來毆打虎賁司千戶楊也速答兒公事。於皇慶元年十月十六日、本院官奏過事內一件、懇刺哈兒等虎賁司官人每文字裏說將來者（有）。

俺依着樞密院文書、差了一個姓楊（楊）的千戶、往宣德府交問事去來。那千戶到那裏、一處約會問事、麼道、說了呵、於哈你八都兒位次內坐來有。怯來知府發怒、使令祇候將楊千戶拖起跪廳、令人揪着頭髮、攔打數下、口內血出。又白紙上勒要了招狀、麼道、說將來呵、俺上位根底奏了。省裏、院裏差人前去那裏、將他每明白對證了。怯來知府并首領官・令史等與了招狀文字來。爲他無體例的上頭、誠諭的。今將怯來知府打五十七下、別個的根底挨次着要罪過呵、怎生、麼道、皇帝根底奏了。依着聖旨體例裏、省裏差人前去、一同斷去、麼道、省裏與將文書去呵、如今省官每都送刑部、再交歸對擬罪。麼道、奏呵、奉聖旨、我知道怯來是一個撥（邊）皮歹人有、將他打五十七下。欽此。

② 訓読 省略

③ 語 釈

〈照會〉官署間に關係する公文書。〈宣德府〉上都路管轄内、知府は正三品。〈虎賁司〉至元二年（一二八八）に成った漢人による軍隊で、屯田経営・城壁構築に係わる。後に、武衛と改称。管轄千戸は正五品。〈楊也速答兒〉名はモンゴル名であるが、漢人の姓であること、また所屬の衛所が漢人からなることから漢人と考えられる。〈公事〉事件、案件。〈位次〉官位の等級、席次。〈祇候〉省・路・州・県などの衛役。〈招狀〉罪をみとめる。〈對證〉つきあわせて証明すること。〈首領官〉経歴・知事・照磨など上級官僚のもとで行政文書を担当し、胥吏を統括する。〈令史〉胥吏。〈歸對〉証人・証拠を照し問いただすことか。〈潑皮〉無頼、ごろつき。

④ 和 訳

皇慶三年（一三二四）四月◇日、福建宣慰司が承った江浙行省からの割付に、「〔中書省が〕樞密院から受けた咨〔があり〕、〔それに対しての〕中書省からの文書に、〔樞密院からの〕呈に、宣德府知府怯来が虎賁司千戸楊也速答兒を毆打した案件があった。皇慶元年（一三二二）一〇月一六日、本〔樞密〕院の官が奏した一件である。〔それは〕慙刺哈兒らの虎賁司の官人らがよこしたものである。〔それによると〕

『私どもは枢密院からの文書に従って、姓楊なる千戸一人を派遣し、審議のため宣德府に行かせた。その千戸はそこに到り、「ともに约会し、審議しよう」と言い、哈你八都児の席に坐った。怯来知府は「それに」怒り、祇候に楊千戸をひっぱりあげ、官庁「の床に」跪かせ、人に頭髮をつかみ、数回殴打させ、口の中は出血した。また白紙に「過ちを認めた」供述書をむりやり書かせた』と、言ってきたため、私ども「枢密院」はお上に上奏した。「中書」省・「枢密」院から人を当地に派遣し、彼ら両者を立ち会わせ、明白に検討した。怯来知府および首領官・令史らは口述書によこした。『彼は不埒なことをしたのでいさめるべきだ。今、怯来知府を杖五十七にし、ほかのものを順次、処罰を与えればどうか』と、「枢密院は」皇帝に上奏した。「また」『聖旨の法に従って、省に人をつかわし、みなで罪を決定する』と。「中書」省に文書をよこしたので、『今、省官らみな刑部に送り、再び問いただし、罪を決定した』と上奏すると、「中書省が」奉った聖旨に、『朕は、怯来は無頼で、悪いやつだといわかった。彼を打五十七にせよ』と書った。此を欽しんで受けた」。

【解説】

モンゴル人管民官による、おそらくは漢人である軍官に対する暴力行為に対して、管轄の枢密院が訴えたものである。楊千戸は枢密院からの派遣で、宣德府に往き、约会にでた時、その席次を間違えたため、知府怯来に暴力をふるわれ、その非を強制的に認めさせられた事件である。おそらくは哈你八都児は千戸よりも上級であったのであろうが、一つには、間違えたのが漢人千戸であったことが知府の暴力を大きくしたとも思われる。モンゴル人による漢人への暴力は泣き寝入ることが多かったであらうが、派遣した枢密院側が怒り、その罪を問いただし、刑を下すまでに至ったのであろう。なお本件は、官僚間の傷害事件の刑罰を示すことが主旨である。『元史』卷一〇五、刑法志に、「諸有司長官、輒毆同依正官者、笞三十七、…」とある。

怯来については不明であるが、『元典章』卷九、吏部、投下「投下不得勾職官」に、モンゴル人が管民官を訴える事案（ただしこの案件では殴られたのはモンゴル人）が見えるが、モンゴル王の使者の名が同じ怯来である。

【書式】

江浙行省を経由した中書省から福建宣慰司に送られてきたモンゴル語直訳体文書である。虎賁司からの訴えを受け付けた枢密院による調査と結審結果を報告する上奏文、それを了承した聖旨からなる。